

口頭発表「本校におけるモルモット飼育の実践報告」

松尾 哲志 山崎 愛理沙



1 はじめに

本校では平成 26 年 6 月に井の頭自然文化園から 2 匹の雄のモルモットを譲り受け、当時の 2 年生が各教室で飼育を始めた。主な活動として毎日のえさやりやケージの掃除などの世話や、継続的な観察、獣医師による出張授業などを行った。1 年間飼育した後、新 2 年生への引き継ぎを繰り返し、現在も飼育を継続している。

2 飼育・活動の実践内容

(1) ～モルモットについて調べよう～

モルモットがやってくる約 1 ヶ月前より活動を始めた。まず、児童にモルモットがやって来ることを伝え、どんな準備が必要かを考える時間をとった。その際イメージマップ等を用いて、モルモットを育てるに当たりどのようなことを調べておく必要があるかを話し合いました。話し合った結果、どんなものを食べるのか、どんな環境を好むのかなどを図書室の本や、インターネットを使って調べた。

児童が調べたモルモットについての情報は、教師が模造紙にまとめ、教室に掲示した。こうすることでいつでも児童がモルモットの情報（どんなものを食べるか、どんな環境を好むか、どんな性格かなど）を確認することができるようにした。

(2) ～じゅういさんに聞こう①～

モルモットの飼育開始直前に、獣医師に

こんにちは！！ モルモット

★モルモットをよく見たりさわったりして、見つけたことやわかったことをかきましょ。思ったことやこれからやりたいこともかきましょ。



すごくかわいいです。おなかはしょうでおしりのほうはくろてかおはくろいです。目は赤くて耳が小さいです。もがふわふわしてそうです。なれてきたらみんなでおせわして大きくそだてたいと思います。またモルモットをかんさつしたいです。

よる出張授業を行った。獣医師からは映像などでモルモットの生態について学習した。調べたことが本当に正しかったか確認したり、調べて分からなかったことを質問したりと興味をもって取り組む姿が見られた。

(3) ～モルモットをかんさつしよう～

いよいよ、モルモットの飼育を各教室に迎えた。まず、生後約 1 ヶ月のモルモットの赤ちゃんをよく観察して、その様子を記録した。児童の観察記録文からは「よく見ると目が赤い」「指が 4 本あった」などの気付いたことや、「これからの世話が楽しみ」、「元気に育ててほしい」「早く慣れて、抱っこをしてみたい」など、今後のモルモットとの生活を楽しみにする記述が多く見られ

た。

(4) ～モルモットに名前をつけよう～

飼育を開始した次の日に、モルモットの名前を話し合う学級会を行い、モルモットの名前を決定した。飼育前にあらかじめ名前を決めておく方法も考えられたが、「モルモットの顔を見てから名前を決めたい」との児童の希望から、モルモットを実際に迎え入れてからの名前決定となった。話し合いの際、「こんなふうに育てほしい」という願いをもち、話し合いをすることができた。話し合いの結果、モルモットの名前はそれぞれ「モルたろう」「モル吉」となった。モルたろうは「桃太郎のように強くなってほしい」、モル吉は「大吉のようにいいことが起こるように」との願いをこめて名付けた。

(5) ～じゅういさんに聞こう②～



モルモット飼育開始の2日後、2回目の獣医師による出張授業を行った。この授業ではモルモットの触り方や抱き方、ケージ掃除の仕方などの指導を受け、児童が実際に体験できる時間をとった。やはり初日ということで児童も緊張しており、この日のうちにモルモットを思うように抱くことができるようになった児童はほとんどいなかった。

モルモットは清潔な環境でないと病気になってしまうこと、臆病な性格で大きな声や音には驚いてしまうことなどを獣医師から聞き、モルモットの負担にならないよう「教室で大きい声や音を出さないようにしたい」や「モルモットが慣れるまでは、触ったりなでたりし過ぎないようにしたい」

など、これからの教室での生活の仕方を考える姿が見られた。

(6) ～モルモットのお世話をしよう～



獣医師から指導を受けた翌日より、早速児童主体でモルモットの世話を始めた。掃除は毎日、4人程度のグループで順番に行った。初めのうちは世話の仕方を書いたものを教室に掲示し、いつでも児童が見られるようにした。それでもなかなか世話の手順を覚えられず、教師の手伝いありきで掃除をこなしていたが、2～3ヶ月経つと、自分たちだけで掃除ができるようになった。その際、すのこをウエットティッシュで拭く、ペットシートを代える、日記を書くなど役割を分担する姿が見られ、効率よく仕事ができるよう工夫する姿が見られるようになっていった。児童は毎日のお世話として主に、すのこと休足マットをウエットティッシュでごしごし拭くこと、糞尿などで汚れたペットシートを取り替えること、餌や水を新しい物と入れ替えることの3つを行った。

これらのお世話を長期間継続して行うことで、糞尿に触れることへの抵抗がなくなっていったり、最初はモルモットを怖がって触れなかった児童も徐々になでたり、抱き上げたりすることができるようになっていくなど、徐々に生き物に対する親近感が育っていったようである。

(7) ～モルモット日記をつけよう～

毎日の世話の後に、観察活動の一環として日記を付けさせた。毎日付けるものなので児童の負担にならないよう、内容は一言

日記、体調についてのチェックの2点とした。児童が書いた日記を2つ紹介する。

「じっとしていたモル太郎」

ひなんくんれんのとき、ケージの中のトンネルでじっとしていました。でも、いつも通り元気になっていたのよかったです。水も餌もたくさん食べていました。

「はずかしがりのモル太郎」

はずかしそうにかくれていました。でもいつも元気だから大丈夫だと思います。よくうんちをできてよかったです。おしっこもよくしています。

生かつか「生きものどなかくなろう」
～モルモットにつき～ モルたろう、げんきかな？
 3月 13日 金曜日 当班 3日
 たい お水いっぱいの人たよモルたろう
 みんなにつたえたいこと
 きょうのモルたろうは、いっぱいお水をのんていました。えさもいっぱい食べていました。でもものんち食べたりしてかわいかったです。

●モルモット当班のしかた

1. 手をあらう
2. モルたろうをケージから出す
3. ケージのそうじ
4. えさやり（モルモットフードとチモシー）
5. ボトルの水かえ
6. モルたろうをもちどす
7. こみをすてて行く
8. 手をあらう
9. モルモットにつきを書く

今日のモルたろうのようす
 （〇でかこみましょう。）

えさのたべかた	あまりたべていなかった
お水ののみかた	あまりのんでいなかった
うんち	げりをしている
おしっこ	あまりない

おせわ、ありがとう！！



毎日モルモット日記を付けることにより、モルモットへの親近感・愛着をもつことができるようになっていった。また、体調についてのチェックもすることによって、糞尿の様子がいつもと違ったり、えさを余り食べていなかったりすることにいち早く気付く、心配して担任に知らせる姿も見られた。

(8) ～飼育中のトラブル～

物音に驚いて素早く動いた際に、すのこに爪を引っ掛け、折ってしまったことが原因でモルモットが出血することがあった。このときは朝登校した児童が教室に入る際

の物音で怪我をしていたようだった。そのときは教員が教室にいなかったため、気付いた児童が大慌てで職員室に教員を呼びに来た。その際、獣医師に素早く連絡を取り指示を仰ぐことができた。獣医師の指示通り様子を見たところ、出血もすぐに止まり、いつもと変わらない元気な様子でその後も過ごすことができた。

(9) ～下級生へ引きつごう～



3年に進級した頃から、下級生にモルモットを引き継ぐ準備を始めた。引き継ぎまでの約1ヶ月間、ケージ掃除の時間に下級生を呼び一緒に掃除をしながらやり方のコツなどを教えた。その際、見ているだけでなく実際にやってみよう促したり、モルモットの特徴について教えたりする姿が見られた。牧草の茎の部分ではなくふわふわした穂の部分が好きことや臆病なですぐトンネルの中に隠れること、糞やおしっこは隅にする習性があるので、そこを丁寧に掃除すればよいことなどを、2年生に伝えた。

そして1年間飼育したモルモットを2年生に引き継ぐ、引き継ぎ式を行った。引き継ぎ式では、名前の由来、好きな食べもの、好きな場所、性格（運動が好き、静かでおとなしい、恥ずかしがり屋など）を1年間飼育した経験を生かして紙芝居や絵などにまとめ、下級生に伝えることができた。

また、自分たちが1年間愛情を込めて世話をしたモルモットを、「これからも大切に育ててほしい」との思いも伝えることができた。

3 飼育による児童の変容

1年間の継続的な飼育活動から大きく2つ、児童の変容があった。

- ①出張授業等で動物の専門家である獣医師と連携しながら飼育を進めることで、児童が動物の命を預かって飼育していることを理解し、命の大切さを考えながら日々の世話をを行った。緊張感と責任をもち、日々の飼育活動に取り組むことができるようになった。
- ②初めのうちはただ獣医師や担任に教えられたことをするだけだったが、モルモットと長い時間を共有することによって、モルモットがどんなことを望んでいるのか子供なりに考え、工夫するようになった。モルモットができるだけ楽な姿勢で水が飲めるように給水器の高さを調整したり、ケージの中でのモルモットがよく通る道を考え、その道を塞がないような場所にえさ入れを置いたりするなどの姿が見られた。

4 担当獣医師や保護者等との連携

モルモットの様子がいつもと違うときやけがをして出血をした際などは、獣医師に連絡を取ることで、程度や処置の仕方など

が分かり、子供・教員が安心して飼育を続けることができた。

土日祝日及び長期休業期間中のモルモットの世話は、保護者に事前にアンケートをとり、都合の付く日に児童と一緒に学校に来てもらい、掃除、えさやりなどの世話をお願いした。

5 今後の課題

モルモットの飼育を始めて1年目は教室後方のスペースを利用し、児童がいつでもモルモットと触れ合える環境であった。しかし2年目以降、児童のアレルギー等の関係上教室内で飼育することができず、隣の空き教室を使って飼育している。休み時間等に自由に会いに行けるようにはなっているが、教室内で飼育していたときと比べて児童とモルモットがどうしても疎遠になってしまっている。

休日は事前に当番を決め保護者同伴で世話に来てもらっている。しかし、盆や正月の時期は都合の付く保護者が少なく、世話ができないということがあった。

(東京都練馬区立豊溪小学校)